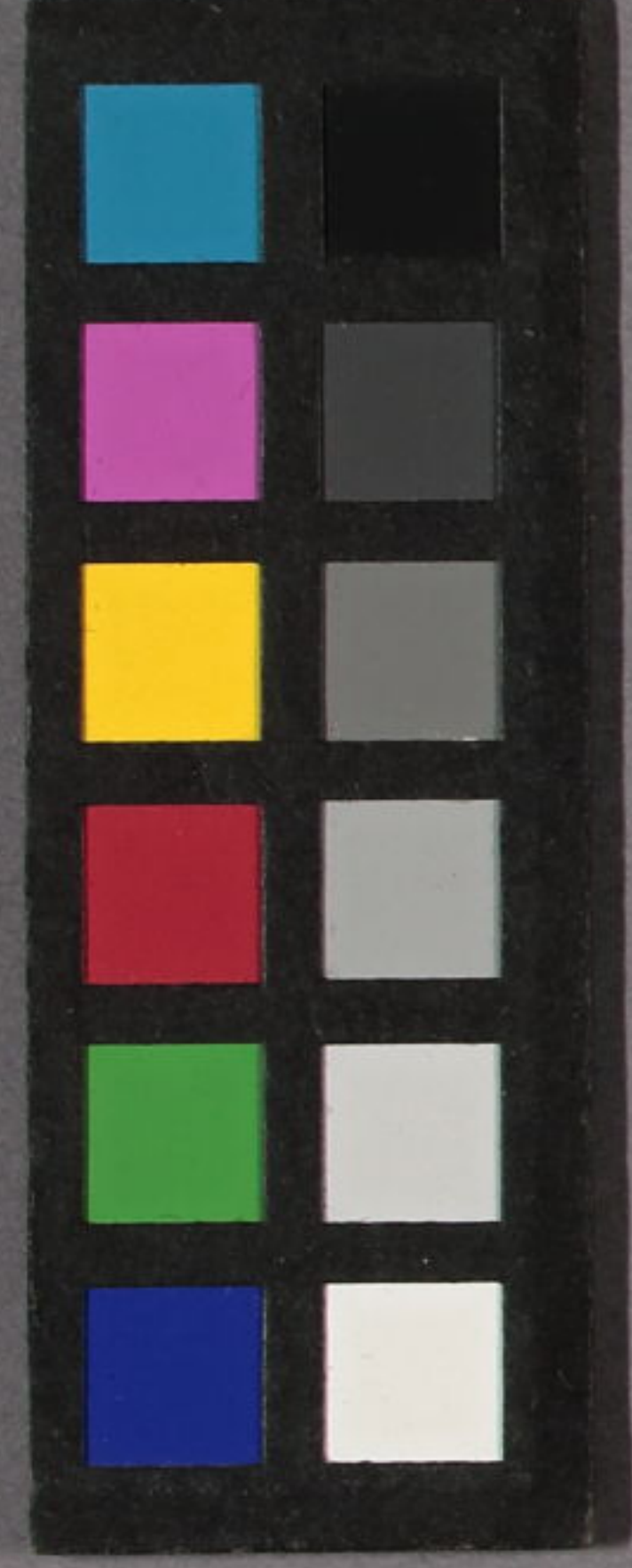


芭蕉翁句解參考卷





芭蕉翁句解参考

月院社何丸著

ひととくまはるやほす小石川
愚考延宝元年の吟さうむうーも石川と
書信あ小石川とありそむりふ友と此
作あり神日記より貞享二年の記より
せもら非さう貞享元年の春さうう丸
きよよ唱ふ此句白風ふあささる事
小児の身もふさうーかゝる能士の
をとりあつふとりさうさうさうさ
さう即公の口癖も貞享元年の白

白き

とらふそかーかさうさうさう
室天和のまゝれの中さうさうさう
白のさうさうさうさうさうさう
此句考合してあさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
いつの時雨笠をさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
以上さうさうさうさうさうさう

すゝと非し

相葉既まはる方すし海が久

志何しきくさむとせしほに

六張海に草鞋折れを笠時雨

草鞋太ししとくさるおのち

草すくし時雨を七約大鏡よ垂しし解す

時雨りや船の帆張みおすく

巨唐船乃船えみとり智てもあうしんれ

うそ飛渡るし

或人をもとくけめて新く

ちう時雨初に草鞋就時雨が

古郷へ旅を勝る會江戸

百五二

を出るに

たかふかふしへとたふかの

むくらぬお宿をうたたくも

袖をかすしきて雨にまら

あまや旅人

旅人と我名は是を初時雨

枯茅よゆ時雨に葉を毎身

一尾根をすしとて非なり

一本一尾根とすしを非なり

見えく通るしとて非なり

旅情の志すのすしとて非なり

七ノ路

宿しよ人我さう初時く水
まぢやや我もの影ももる時雨

小倉山

十ノ路

一書小西山定家郷に宿るの亭に思ひをこ

伊賀の山越

初走く我様も小義をほりけく

十部大後よき

人しを時雨と宿を空くとも

一くももる田のあり梅のまはる

能外う海まで

台巻 三

修し木に庭にいさめ時雨は
能外と壺井の人よりかのみは初め我様の枝
の形のはよくももる

十月三日詩六亭

りふさのうり人し年よれ初時雨

石めむて香炉をぬく時雨は

右詩の一句一樹下石上拾香花をよもむたむ

山城へ井もはかるかるとく水

島田次塚本氏、家まで

宿かアとく名をさすも時雨は

宿かアとく名かりての論と七部大後よき

う水もぬる

ふるさを志す——時るの大井川
大井川をながれくもふるさへ大水も松を
ふるさへ作あり

新暮のふりてまやき時雨は
月の鏡小春のまろや目や一月

古瀬をより月の鏡波鏡もちと見きりて
吟くふくたつ川ねを月正月とまろく
あやうら鏡もまろく吟くふく

~~~~~を~~~~  
まろくみりやふるさよめろの影法師  
あやうら鏡も尾の三石の鏡を捕まて  
まろくや月も糸さるまろく

白を記

愚考後撰「日く~~~~めあ~~~~と~~~~きこ  
~~~~秋乃文~~~~よ~~~~り~~~~の~~~~  
うの月の細きま~~~~の~~~~

4. 内一校あり
せよ白へ~~~~一校の~~~~
船頭の小舟を~~~~や~~~~

此のよ影法師の~~~~
~~~~を~~~~  
~~~~の~~~~  
~~~~入~~~~

狂句本松の~~~~  
大部大流~~~~



舟の画賛

風やたけしよかよ進て志つちりぬ

公石云新古今「竹杖たたねふきよゆ」  
夕暮のたけあをの秋もさうは

木枯や頬脂のこゝろ人死歌

之河玉新城東平差沼

程ちろ気さそ

京に倦て木舟舟中を 仁居

三石没乐歌若沼影八高層七子石交代出寄

合流さす

英の玉耕 吉亭

木かろしよ白りや竹一 かづりふ

石巻 又

松松葉とちりぬちの帰しをよ

彼大根の糸のうの糸よあそびをきこて

庭しよんて葉さうねのむとゆきを徳也

風よす

決かろしよよ岩の突く形を

一書よ杜詩よ「兩行秦樹直萬点蜀山尖

一書よ木子蔓湯の清よ葦山嶽寒愈峻

愚考風よ木子蔓池よ云荏苒本池よ云稚古

天百土千年之何國司言寸本國相生山よ相樹

あり氷代り樹よして中支四十九支園之十

九尋西の枝之千尋矣る棲心支八咫余

尾の支まて全才を金巻なりて紅紫花



光ありて一尾一茎千二の傍流と成す是風風  
さう興る文徳をぬむ天子神皇の記をひき  
き儒佛の徳を弘ちし子とて何れ松のこけ  
ろり申す佛像ありたる是れ其の瑞穂光ぬ  
来とて又新神人乎山よ入せば移りてち  
一本伐て其の師日光明千二其將四天主の  
その像一乃これ彫刻しとて其上の妻に  
やう煙炭山風を身としとて其の風を  
後り後りとしとて其の神の五百六十石堂  
外八百石天名子以ておのふ松とて松と申す  
所よの位職の事とて其の事とて松と申す  
さるる其上の松をきて岩吹出たり松とて

白雲

佐せりやう七

あゝ松や世も一いろは風の音

あゝ松の磯よけさえるところ

愚考和名抄に冠葉と考又多岐葉と

松のトサカと松の松の松の松の松の松の

かへ

松のらや松の松の松の松の松の

愚考松の松の松の松の松の松の松の松の

て和歌と詠するところ松の松の松の松の

余の本も松の松の松の松の松の松の松の

ゆゑ詩の一句よりて松の松の松の松の

よんやと致し松の松の松の松の松の松の



すむも福系山も鞍了山もいこくへき  
をい理の正しきつりをあふく下りむ  
へ

おれらの蔵室を訪ひて  
花皆枯て雲をあらす中の程  
春潤て水志あめりや冬もがし

孫行

つくつくと家を縁よる枯形は  
馬あつくつく我を縁よる枯形は

愚考翁の句もつる半がうう画よるうう  
るあくくの方成下是再葉の同吟やう  
法本よる時外として友部よ出せると大よ

句集七

耶ぢりまら日帰るくして家糸を縁よる  
覚来あきの宮とがう晋書三行晏粉白不玄宇  
行歩自顧影又後赤碧紙よ新臨既降本葉  
そ殿人新在地作見も路の傍し似れを  
抄出して友部のすまひをうまやとゆい  
情といひけしきといひは画法は寸馬豆人と  
瘦あつりう法は枯叶を伴て涙をたふす  
へ次のですくみりやの句もあふくは

樊田よ訪う社从大破れ集

地もよふれて羨ふかき

垣衣よ枯て保かふやうり

愚考樊田ら大社神飢七百ふとや奈神日本



武蔵と云ふ句の起るをわづらひ知るは後人の考  
明を待

大過菴の主道系居士の考名  
をゆつりて久しき事と目ん  
へむと契りしは終るその日を  
やむは初を一枚の糸と階ぬ  
乃よりながめをよあはらぬ  
といふをゆて

其形をちや枯木の枝の丈

愚考徒なれどもはゆる程一七日はあはらぬと  
あせると非なり初を一枚の糸とあはらぬ  
又よ翌年のつりやると服糸のつりやらぬ

白考ハ

一周年の詞は初より二枚と出るは誤なり

能はよと病中

旅に病てあるは枯木をかけたる

けりとは誰の云をさして春秋五十一  
は故しむる病中の枯木枯尾をよと  
知へ

三秋を遊て中庵は留れを

同友門人ロクは弱り来て

いふと何よはさくはる

ともかくもはるしてや雲の枯尾を

神日記よ雲の枯尾をとおちりかふる未熟の  
りのありては雲の名を流すは誤なり



きり身く雪の栞尾をたがうてま一句如能  
せけよく考いへし雨あき霧雪と吹を起  
かてんそしめくちむ高う霧うの時ちと  
もかろもたうて雪の増かふるまでをまし  
て死とさういひといふ句意なる事と知る

骨はあやかしくとるよる蝶の虚  
掃りむや茶を風の秋しも志くひ

九らせの暮秋を市中は後院  
て居を深川のふとくは後す  
長安も古来名利の地有る  
まして金だるものうり  
絶しと云けむ人のかこ

句考 九

見え傳ふるまはひ身のこと  
き故もや

は東の戸は茶を本意かくあし  
愚考 仔細よりありて橋下は九ヶ年うろト  
居ありて天和年中深川へ福住の時の時  
あり長安古来名利地空手無金新踏  
の浪をまよと尺ゆゑ句の意とあき  
神を月の初つる月の浪と  
ゆゑえらるる鳴鶴寺は旅の心を  
澄して

さるる候や澄てちるる  
愚考 けい分の脇は李由と有る遍照寺の僧



うと受えやめつる

三尺の山も嵐の木のそりぬ

愚考 鶴林玉露曰伊尹の墓もて荒石湖三尺  
黄壇直棘遠又許渾くうよ四尺孤墳何処是  
又孔子封其母墳崇四尺まををありま  
必所そく墳墓よそののつやるへりれともさ  
かすのれをいと跡をさつり今一墓あり  
山もさうある貴がう成樹あるを以て貴いと  
りよ流よよ三尺の山やれとも木あれば木の  
まもちるといふ意味もある然りれば高き  
よらるとんえつる

らさ敬一 甲斐の落をや田つよの浦

句巻 十

愚考 甲斐の川上を信濃境敷未示より 甲斐  
路より余同西る河と流河の境もて富士川  
といふ甲斐凡三十里とゆふを甲斐川を  
一日よ流れ来るるも必定に流る流河と  
河の流る子けれを玉の名とせんとす

多度投現をさる

ま人よ我れをちるせ流る川

一書よまの人も智もたけく徳もたけく功もあ  
名もたけく徳もたけく知りたけく徳もたけか  
くよあををさるよあはれもたけく徳もたけ  
の境よ流るこれとす  
胡蝶云 宮司よ對してかたしすよ家々を



なすしきも志すし一むふな大海系は持おて流る  
とどろりもちりしむれとのる白鳥あり  
鏡古祿は云市むらゝ家名とあり河古より多  
座権現をさるとして女養女をさるとして  
ありてなり名とあり極喜ハ世よ志すとも去  
りなき隠者なれも家名をちりせりといふ  
名すちを流るふあむや加とわとの字換  
也  
愚考、夫人よ母名をちりせるといふはさる  
世俗言なり夫人の流すりなるすまといふはさ  
りり下知するといふやういふは流る色蕉と  
名のる河野の流るふ川とすりかゝる家名

白卷 十一

をもちりせるといふむそ一るら妙能す  
かゝる癖業をいふ後のありて流るのうは底  
をさるる事、此流権現は流  
再考、多座権現といふこともあるはけれとも  
是とも勢方丹葉名歌の吟なり流る川と  
いふ川の名なりて全く流るはけれなる  
川よりありて流るを近世の能士は流る川  
よむらふて流るは流る田なりとありぬ新  
名目とて流るる片版りてなりともなり  
又それと流るるは流るて流るは流るは山  
なりとて流るは流るは流るは流るは流るは  
みらるるは流るは流るは流るは流るは流るは



もあつてはつて之をいふ族譜の初巻の案  
の郷歌なり心持の爲にその一二を記す下  
跡生山ツチノ 五月山ツチノ 糸帯山ツチノ  
花見山ツチノ 萩山ツチノ 雨山ツチノ 下れを  
跡生山ツチノ とくをさそ 晴月山ツチノ とくを  
五月山ツチノ あれをさそ 萩山ツチノ とくを  
花見山ツチノ あれをさそ 月見山ツチノ とくを  
萩山ツチノ あれをさそ 萩切山ツチノ 山ツチノ  
とくをさそ あつてはつてのこゝろあつてはつて  
地名よりさそ 萩山ツチノ とくをさそ 萩切山ツチノ  
跡生山ツチノ とくをさそ 萩山ツチノ とくをさそ 萩切山ツチノ

玄實傍於三輪川のまよふにたれよすきで  
糸名をさそよまよふや馬さむの志を懐く守

あつてはつてのこゝろあつてはつてのこゝろ  
あつてはつてのこゝろあつてはつてのこゝろ

愚考 既よ蕙好の契とて秋の糸ぬみ  
桶もいふ甲りりしと出せりいつれと  
非なる事とをさそはかくりやりの秋の色  
のさそよまよふと出せり

月の浜の照守本堂再建の  
身加牒のまよふと四竹樹密  
よまよふと減よまよふと  
少りて跡生よまよふと



不意のけしきを庭の菊並に  
是も又李由の任持せる事し

花露の長男の意をいく

山家集の歌に数々

一家も亦あそぬ菊北氷くや

續懷表に解よ妻

元祿癸酉の初冬九日素堂

菊園の松の下の宴を計

正月の事よき事しけはら

あそびころをむすめく

ともやうに菊を居時則き

陽といふをよき事しと展

幸陽のこゝろしやいふも

あゝ秋を移秋菊を詠

て人くをすめられ

菊の香や庭よきれはる

悪考花集子辛酉の初冬と出する

々々院に續懷表よ妻し

菊を室くの時辛酉の事し

曰東坡云歲暮菊候不常

涼天任月即中秋不須以

吉菊始開乃与客作重九

九月と延表帝の由忌日

とある



よ申して九月の宴をとりめて十月は御菊の  
宴はつれづれをひくありしに御  
展守陽の例の申統さるも出ず 昔の意  
の事と王弘より履を造り送り又座  
ちのき履をとまきしる例又双中を履て酒を  
誂すの勢法を貸あけてのそへしは皆是  
隨園の傳なり

時物のまゝ子の條や海 屯

古調の句々皆かく謎のみ多し 時物と別  
小夏なり 餅もお秋とくをそれを海を  
とす

口切やたし内儀と小は糸

内儀内室内方 藤中 御蔭 小の方 女房  
後達 后 房守 木塔その陰に影るありあり  
たしなる字のなき自然なり けり又古調く

支梁亭 口切

口切は塙の 座をなつりし

一書と云塙と利休の産土といひしは  
銀島回廊の地あり 海あり 座は泉村  
木の石部といふ 宗徳の句と利休感あ  
りては塙地と其の報りて作られし  
然れども深川の塙地も海あり 名えて塙  
の座は似しるなり けり

けりしきやを友老り 藝文の表



榮新次 伏見... 山令謙  
山令謙 仲のやうな沼を非

一書より日蓮上人の報書より... 御新供といふ  
の令日家の位を修す又令式といふ  
十二日十三日毎日多く風をい... 日蓮の山令謙  
荒といふ

愚考

日蓮上人... 房州長狭郡市川村の小湊...  
又... 三玉氏貞應元年二月十六日...  
尊名善日丸と号す同郡法隆寺道昌坊

白巻 十五

のまゝ子とぬ時... 十二才十六才... 出家... 是生  
といふ又蓮長と美名を... 後隱念へ出  
て浄土の宗義を學び又律宗に入祿宗に入  
志言宗に入徳宗と云ふ編繙學を學ぶ  
あるやうに著述... 横川  
が光院に入釋... 遣唐使...  
... 天台山玉清寺... 入... 遠福作...  
知備... 一心三觀... 山... 三井寺  
... 天王寺の學... 湯...  
法を... 三昧... 建長六年念佛...  
の業園と云... 三十二才の... 二月廿二日  
... 室岡... 一七日... 忽



とて大悟しはた八日の朝日よ白ひきり  
合はせ南無妙法蓮華經と教十篇唱へ一宗  
宗祭ふ乃弘安五年十月十三日寂す後  
醍醐帝勅して大菩薩の号を賜ふ葬るま  
身延心しくま

水滸二味又えりり 四取紙

愚考一向宗門流宗澤古志宗ホの宗名あり  
此の紙と親寧の聖人十月二十八日寂すその時  
修好するを報恩儀ともい儀とも云は儀中  
多を嗜み天子て此儀風と云をこれを門徒のち  
院在家とも十月よ紙て修するあり  
此の紙とりり

澤古志宗親の聖人乃澤父皇太后之大進  
有範卿少母と八幡太師義家公の嫡男對馬  
守義親の少息女とて吉光女とす有範卿々  
天津見を根するの少苗裔大藏冠の末孫とす  
母云のまゝ金糸のさる宮に仲入とて懐妊  
一則誕生ありて松尾君とす西の方と白ひ  
古石をめで佛像乃の堂をいともむと死  
中より其あとのみりありとく下有為轉を  
おもひつけて、今も親すあり有範々々経あり  
費し玉ひぬれを頻に母云と出家の形を立  
弟叔又後三位系系換ちる範徳々々ひり  
那ひて終る九歳の時天台宗の系系大僧正乃



女子よめて範宴少納言の公と申夫より敷山  
乞り根中堂の系師如來へ千日の系信あり  
後六角堂の觀世音へ百枚系信ありて救世喜  
慶の告命よりして法然坊の才子となりて音水  
よりありあり時より二十九歳緯空と号す或夜  
六角堂救世菩薩の由ありて告信くとも心か  
けまひてやうの文をよるゝの上 行者宿被設  
女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨  
終引導生極樂 多くは法然坊より人の由あり月  
緯縁空教下 兼實公の由ありて才子の中 一心信  
の行者をよるゝひありて一人我より綿ハれ娘と死  
して妻帯となり 末世の以去より必昂菩提の

能ますとありて別緯空と記してやうの偈  
を授けむよまかの觀世音の行者宿被設女犯  
の四のちありて實公の由ありて止りて玉娘と  
かゝりひむよ時より十八歳聖人となりて三十一歳より  
後三十三歳の時救世菩薩より流罪法然上人より  
去依國へ流罪是山へ南都よりりの差違より  
く、せし後二十九歳の時勅免ありて法玉徑也あ  
りて終りて法玉意原の一家を弘め弘長二壬戌  
十一月廿八日入寂時より年九十歳、法令を至冬  
より成て勅りありて少老と号す正當を被  
恩蔭と号す子依合より十五より寺と号す  
下子依と号す西東佛光寺より田依 貞正寺



外工綿織寺といふ一紙紙系蘇江にあつ

尾なるの香川より云志け

ゆるひ中より西かひ料の理

てゝ後々

三十里尾張大根乃吹しう子

一書に幻住菴左伝の時の吹く名古屋の  
二十里こし

はよふ書はるしりう去大根

大根引といふ事と

蘇江より小坊より系や大根引

去東抄に白風云云はらいあがるふらありろき  
左京曰吾子今解しかりうむ只云して去る

るるしただくをむと書するよ奇山遊谷又  
社古寺秘ふ歎よのうをさる団能うむよ  
うたよ古来多し一形めめ子歌よ書の意  
さるあつ後編しりうこれをるをやさす  
又書よびりて形好すしかりぬめあつむ  
是あつえま書のあきとて用ひしれす  
今めつしりくむ情の候なる書あつて是  
を画とがりてりりかむるふあつてもよ  
かむむしれを大根引の續よまをむるの首  
お下けしりむ蘇江よ小坊よのちりりり  
そあつる書多しり古かりむや拙かりむや  
あつてりりり風玉りりり見何来り







地多物産の極多也

明方のや白魚志ろき一寸

愚考いふに申すや神日記なるの部此  
句明の書入るにいつたはあつても夏冬の  
客のあつても白魚は冬場のうちにもあつ  
るをさすなり水と眼茶の旅行といひか  
すや

胡蝶を後日記の部に入るとあり  
明方のやとあり

全人に杜詩一雙白魚不受釣は魯隣  
隠約人同得多すは合此外漁惟一雙白魚  
三寸不受釣といふ一寸の字眼はあ

白魚 二十

よれるあし

何葉安適ののー牛修

系居ーり

一葉持てささくくむの音

え和あより痛をむ

りさくーたて

水さく麻入とさく 鷗う那

絛ろや宮入日の 新をき

さひーさ湯ちもさくあるは

仙化つ又退

神のよされてさくー 流嵐

古井さくれひさるさく



愚考碎瑛集よと崇神天皇の所時日本よ  
今この山と遠くへき那おたりすすけしへきよ  
あつたれを神の行りあふまよと唐土のよ  
葛山と金山なり信山の末申の旨欠て飛来  
りつよふれてつち吉野山と成つち筑波  
山とあつたれを古今集よめろこの吉野の  
山とよふ拾遺集よめろこの吉野筑波  
とよめり

そとさねや不破の宮ちち人ち後  
ごと焼て色掛あつたをささ  
一書よ三泥お池下の茶店とあり  
故標よ池列下ま地村といふ所よこの吟なり

白き二上

予よ三作よせむ  
一書よねまよとゴといふけすよや  
一書よ信川集よ不ひくも池新朝の宿り  
よ信系司をと抱へあむ去るの曲突と海ら  
一書よねま焼てと出せりめゆ多きこのさ  
多めりむ

李よ下り妻の悴よ  
彼きうの肩あやをまねや凄ま  
りよさくくと帆投きき入ら  
鉄人と古河の歌よとあつて  
きけれと二人語あてれりよ  
愚考集少細言よあまのいみくき



よあけくとけりてついでに鐘の音の只お  
の底なるやうな夢のうらみかゝる  
情もあつぬ

塩鯛の 塩くきもきー魚の 柳

是こそききの力といふまゝ山嶺叫山月落  
とけりやせるおすこき巴峽の猿もよせて客  
の月とやさうり流衣声とけりー待の信情  
こもりてくやけい感心のまゝ塩鯛の  
塩くきもきーやあひよせられんも  
長空の形もくさくさりて老の果年の暮  
もこきれぬまみ文字を魚の唇とてあれ  
さうは流衣の妙を知りて其の幽情をまよ

透せらぬ情ハガをくくつて知

葱白くけいひあけくさるきこ

花とまゝ裁をきりよきさうか

きつーこや燕はなきおの袂袂

風まきりよ系ゆ

最もよひとろ折くおー

玉きり風まきり略縁起の鏡堂ありそれ後  
四智とりのてマカよ記す時う東より大系廣智  
てて自然とて縁を現す徳あり後人者の  
怨くより後万縁をほめてめらうらうら  
情よくてくつ利なきと縁給人かきる表  
尔あつる系ゆそく後を記す月方此



不列を新風を忍びて遊る成程すまはれり  
絶一風のそよききと清むと折しゆく  
我らも一木て一草のそよ風のそよ

一書上惠崇之詩と云云重只天雷 經香檀

地花 他年訪緝室 寧憚路岐餘

十一月をりめの日外花の回景  
よゆりて 經香 鼓戸の西く

却出で 林の 縁 森の 日 影  
ほの せき けい けい けい けい  
あゝ けい 又 よう けい けい けい

白巻 二十三

胡蝶を養葉曰保氏松花よきとさうり  
花をよき人よけいふん地一  
今くくして 宿るれぬとさなれ 味つるさよはの 梅よ  
我らもいづれも

於際云杜牧が待は行人為倚 東橋 柱 正是 千山  
雪 濃 淡 するとの 意も あり あり

金屏の 松乃 古ひや あり あり  
一書よ 初も ち 屏風 する 山を 画て あり あり  
て 平仲 といふ 者の 宅の 所も あり あり  
根 屏を 信しく 金屏の 古ひと あり あり  
うさう あり

愚考 古侍と 疑見 天造 十二年 飛入 表 家 新



屏表 空松蕭瑟如有声 隔窗微茫如有情  
は画屏の侍を侍ありありをいふも又や知素  
とも再々ともいふは凡系あきらかに

晴西堂

湖水の波を遠く田螺一丈  
そるるれ蟹の殻をいそれよ  
牛ももるるも鳴くも事  
なれ

類は津や田螺の書もあつて  
志もくく隠れ居る人  
志もくく梅と心のあつて  
志もくく梅と心のあつて

二方の注名人の解す不かの類は津はくくや  
そのもの奇をもあつて

千川亭

れくく牙作次をえりや又も  
智者楽水仁者楽山表徳は川ありくくや  
山あり

かいつくく軽ん合せて又遠入  
かいつくく考なりイヨメとも云鶴 鶴 鶴  
羸 鶴 修 水 色 等 の 書 方 行 物 類  
吳 名 工 出 入  
己 々 身 を 枕 二 鴨 の ち ち 時 分  
敬 毛 二 色 二 下 好 二 鴨 の 足



けふも一物の肉より焼くこれをして自賛の  
吟と云はれり

人々く師をの海えむと詠す  
一せりれを

海られて鴨の志ふのうらや  
蘇美と松風の里音有り  
お明くうらや志すも詠す

改日

星海の雲をえよとや啼子言

悪考雷月と八月はあつての若くは  
書中吟略と改今とよいつとや  
とて吟子海のつとまや

百卷二十八

ひらきよきよきよきよきよの  
又浦子言ともあつてよ  
るよ破の字必よせり

吟子言と南れ海の果  
よて海のをよめてゆき  
ふとしくいこきやうと  
新よもよめりととくを  
れなるおや

一書と杜玉とあつてと  
よ略て杜玉といふその  
やう山歌集「葉をよめり

一書と杜玉とあつてと  
よ略て杜玉といふその  
やう山歌集「葉をよめり



くくひて程あまかふる山さうがひされをい  
ふよきれを合動くす

いしこ誇りと迫りれをんり  
けけりて

いしこ誇り似りのをさしきり  
杜わう不幸をいしこ誇り

いしこ誇りのをさしきり  
いしこ誇り

愚考 信長子寄と三別 涯兵部 田系の出陣  
まで尾張の師志の鼻よん合しる所なり  
杜國と尾張の人なり いかさるるや  
秋の採定よいしこ誇り志列とあり

愚考 およそと愚考 烟の事と 仁徳天皇の御宇  
百済より高麗 烟大人おと伝守とあり 然る  
と 碎碎記も云むしこ事より 鬪を伝しり  
不 然 か なる 藤人をもえ 和泉の鳴呂館と云てあり  
より 都く 百日ある 藤の事ありと 中聞せりり  
いしこを 奏向中より お説 長祿とて 曰 高徳五  
事 知人 有 事 知人 乃 女 房 を つ づ ぐ  
て も し め て ま じ め る こ の も や あ る む と 云  
いしこを さしきりて やまをさしきりて  
あしこぬとて 女房なり 女房なり 女房なり  
といひしるうねての 終をさしきりて 終りて 終り  
るを 終りて やまをさしきりて 終りて 終りて 終り



日と云ふれを子出来て後心ゆく一ぬるよ人の  
くちま志しれぬるのをも一かまうさるは  
あこれちるつるつるけ子のこも一へる  
ちるちるつるつるつるつるつるつるつる  
もつるつるつるつるつるつるつるつる  
よむつるつるつるつるつるつるつる  
れつるつるつるつるつるつるつる  
ぬ天をとむるつるつるつるつる  
してちるつるつるつるつるつる  
あつるつるつるつるつるつる  
一書よけむら貞享の頃の作と見えたり

白巻二十七

洞のつらきおわく一けれとこひつるみ  
一ありてを心用といふ下へ負山を地名と  
いひしる備土あり只を負守を負山とす  
韓昌黎翁上賞清別書豊山上有鐘馬人所  
不守到霜既降則鏗然鳴蓋元之感也  
一書よむ傷中五名法はまよる名あり社人  
玉後とてつるの幣と名中よるつる  
修すれを名明初すをひらきお十所  
一書よむ匡房卿の翁司馬砂の尾上の隣乃  
房すやりのあつるつるつるつるつる  
愚考貞享の吹つるあつる天和年の作



なり次、估中の冬、の解あてらひ山海經曰  
豊山有九種霜降則自鳴云々近哉集より云々  
後と申十月、霜あててひととて鳴をり云々

去屋四友を送りて後合をり  
ヤウツ

霜と踏て鈴鼓引きて送りり  
あてりなり、打や霜夜のそと、石  
を和きて夜ひく、控子く毎  
を和括よくく、辛辛の也、世に  
以上皆古調なり

舊の夏の長入せりり、を和の鈴  
當ふふ字り、この和とす、と非なり

愚考、昔々すて、表の白さ、よみ、家持、網  
のみのみ、ひろの山の、昔々、吹かす  
秋、と、山、里々、面の、昔々、  
を、忘、け、み、く、吹、返、す、秋、を、ま、つ、を、  
た、し、る、昔、の、た、ら、う、と、を、せ、り、秋、の、風、  
と、も、向、傳、せ、り、又、それ、を、一、時、に、表、を、和、を、  
垂、つ、れ、と、妙、の、妙、を、と、り、

か、く、く、と、お、ろ、し、ま、さ、り、竹、の、和、  
炭、す、く、く、や、氷、く、く、す、く、く、の、霜、  
火、を、焼、て、今、宵、も、屋、根、の、和、清、さ、  
ひ、つ、ち、田、よ、を、和、の、む、え、る、物、は、  
秋、衣、も、和、や、垂、う、と、括、て、え、り、



鶴鶴の足え膝一 橋乃糸

糸人の草席を仿ふ

これたし手抄あれさき序の糸の者

七部大段の舞一

伊川大橋成能せし時

有かやいりて踏橋の糸

一書よ云元禄五年伊川の大橋新くさるる

まはさるふはし

愚考如く拙とす新叙のりもの二十二年

以来のひと一葉の心持もあつていうめ

く罵るとあふうと記す故て天下の大事よ

おのくは何ぞ こと急するもきこや

病中

茶のむさしニや 糸の橋は

古に世に志ひて

糸の好 橋の 咲る 大桶は

一書よ云は悉大桶も思われす今く世よと

糸の陶器すして大なるもの係よふあり

といふものやうむう 桐大桶は 豊後をを画

くするハ仲古よりのもつや 後水尾院の御製

とも又東福門院の御好なり 中略 糸の橋

具ら火桶も巻されし今むうよ人乃

折るる悉となりては又ハ折子の糸よさるる悉て

有けりよと銀しるるる



澹然云此ハ其の季もや入屋かむむよるよ其の塔  
 と云下ノ火桶と云るも季もを体よるてしひな  
 せしかろくも拵るハいせものよて有下しせはハ  
 け花用埃るも花と仇れをもて火桶の火は花  
 やかよをこりころをもと中と足なりて拵子の候も  
 如くとしやや拵子と拵るも赤きものやうる上  
 又火桶ハ中古より拵るもと画けるやれも  
 よせある半もてておかりてかくはる候も  
 可る下しといは後ハ又拵籠  
 いかさぬ拵るも今おろく一俵も火桶の  
 白なれも火桶ハ画し拵子を候も  
 しいしや拵るも白ともせりれ候も

集皆反ハ出しとせられも予も又改め後  
 體と候のみ  
 一書ハ夏の部よりいふも為縁なり元か  
 うりし火桶ハ拵るも蓮せの中とを  
 足ゆれともその白とて古歌ハ拵る  
 あこの原れもいふもとせりか  
 てし又火桶ハ画くも原色香の圖ハ  
 了りたどる拵る夏の香の圖あり拵る  
 うらひす又おまの夏の香あり拵る  
 俗人あり拵るも拵るも拵るも  
 拵るも拵るも拵るも拵るも  
 愚考も白も白備るもとあれをな乃







部より変じてあるはかの後年の大根を秋  
一季よりかいて又之しそ外に大槩皆一季よ  
かいて又なるを教の存と交へおし多のち年す  
すにせぬを變じて用ひへし又火桶は極子  
を極しんとしと非なり火桶の紐は極子のあ  
る句に定て火桶は極するは極するもあ  
へし

年浪系は火桶と和名火桶と並と桶と和州  
相山に於て火桶と竹守法が訛云ふ人のあ  
つきくしそもの竹守急きし火桶云ふ又  
十月文集より高きと火桶よかてを  
し指遺系より云ふあきと火桶よ牙を

りしてつれあきしへはつらもつらをや  
再考火桶を陶器と云ふは物極く非あり  
本をとりて肉よりを鋤洞やとをうらむ  
し陶器と桶といふは別なり

あしかの去りるを火桶

あし年をと考く人

火桶もきしや洞の熱き音

曲翠亭

火桶や壺より容乃因雨

白氏文集に取る殘灯尚壺新やとのけ  
きなり

きりくは急きし火桶



旅のやうに遊ぶところをきき居  
るを侘て

侘のぬ 旅のたゞのや 並火燧

一書は炭焼ぬとみ文字を書きし非あり  
一書は並巨燧よかところし 旅の公をいり  
いしところくと居るすぬさぬと並火燧の  
公よといふ意し  
一書は其角云是し 慈法和尚の所は「旅の世  
は又旅おしとるすすら 旅の中より少め  
とてんすしとよやせむひしよありひ合ふ  
行しとあり  
於燧云 季経朝臣にうれ女のうかれてあり

旅やうにすつてし 旅のうそありらる 旅  
歌を棄胎換骨したるものよしそ 旅と並火  
燧とを併せしとさしものちれを

小野 炭やの寄り人の寄りせし  
白炭やかの浦崎う 老乃笈

許六亭

清炭よ菊割る音う小野の燧

三面大悪の燧

忘るやうに 祓の双中の締くく

祓の糸書よけ画かきしとる人も捨念内  
祀とる十三やよぬし 筆のたさひのうつ  
かりけれを 紙の書けるとき 三面大悪未考



大正天皇を兩域徳育の厨の柱と云ふる並に  
飲食とせしむ神を祀るべくして大正天皇と  
も是れなり後後より大己貴命と云ふるに

貞徳翁の歌  
法集知名や志しぬ翁の丸及中

知りや志しぬ翁の丸及中

一書と志しぬ翁と云ふる古々著家集の  
形廣王の言ふに氣を移して其のけしきをか  
ら翁と云ふに志しぬ翁かきと云ふる

一書と志しぬ翁と云ふる古々著家集の  
半ら指遺集旋及歎の両寸かきと云ふる  
うらむむひ居て又の附より其志しぬ翁と

句集之十

あふ心此すれにほ侍種五菴宗徳法師画像  
自伝より引く一かきと云ふる世のうら  
むと云ふ翁と云ふる心れぬと云ふる  
うけわれぬと云ふる心れぬと云ふる  
徳の誓しと云ふる心れぬと云ふる

一書と志しぬ翁と云ふる古々著家集の  
切やせしむ知名と云ふる能知りぬと云ふる  
又文字より歎息と云ふる句意と云ふる  
勝然と云ふる心れぬと云ふる  
心れぬと云ふる心れぬと云ふる  
入てその知名と云ふる心れぬと云ふる  
七及九と云ふる心れぬと云ふる



やさしむとせられたるを去りていりてきりてさうよとくもあふ  
は今もいふをえりてさうよの對せしむひりて元及  
中の情いりていりて古くもきりてきりと余情を令  
めりてさうよなり

悪考初名やいりてさうよの情分明なりては貞徳翁  
ももきりて八十に迄存命ありてさうよの誓の結  
振座よの正しくせられたるいとさうよの思ひやるといふ  
義もさうよの情念一知りてさうよの知念やると  
書得りて子載りてあややちちとあややちちと  
ふと知りてさうよのさうよのさうよのさうよの  
及いりては境をさうよの考りてさうよの考りてさうよの  
義とて所通季吟の作りては徳徳の先達と

歎矣さうよのまを初名よをかりてさうよのまを

源川八景の心

米買りてさうよの袋や投りて中

一書よ源川八景と有る米買りてさうよの袋を雷と  
いひては袋よ中よかりてさうよの袋なり  
一書よ是もさうよの日の息よ源川芭蕉庵よハ  
人高人高とては袋なりとせむいさ米買りてさうよ  
紙の袋よさうよの袋なりとては袋なりとせむいさ  
及中よの袋なりとては袋なりとせむいさ米買りてさうよ  
みなり

一書よさうよの袋なりとては袋なりとせむいさ米買り  
よさうよの袋なりとては袋なりとせむいさ米買り



のやよめあはれうらむのやよめあはれ  
 やよめあはれいさよ切字なくしひてほ人も  
 くらくうらとあめさる  
 愚考そのいさの徳を投及中とりを各の  
 徳といふ徳の念よなるあり 米買よユキのと  
 りひうけて各の徳や投及中よとりひひ  
 うひを本とせし 徳をぬを米買よユキの徳  
 や投及中よせむと連続し なるやうにやれ  
 徳といふ徳やいれささうらひひひひひ  
 徳後よ違をこれぬすすくし米買をと各  
 よよめころころあはす米買の徳や投及中  
 よせむと今年も及中も持ぬふく各の字眼く

白雲三十二

あらゆるなまきのあはれとて河豚汁  
 河豚汁や網もあるのよを分別  
 或あよ古き奴僕有ては  
 聖賢のそしけり  
 是身のとすしけむや河豚汁  
 是子とあやうすよ近よしけとせくあはれ  
 ころがらる  
 抱ひまぬ純物のて七里ヤ  
 胡蝶之七星殿の侍衛美運目親歳子殿想属  
 任公釣又るまよ水のいの浦誇り子りいつ  
 つり網つりうて七日すてまよ是おの徳をとて  
 のゆき



註田梅人亭 雲裏の家と息  
いよせそ九衛弁といふ名残  
跡一そ

水仙や白き蔭子乃とゆらゆら  
三所のま白きとらとらゆらゆら  
子二人へ想せん梅塔の名と  
よへて

水在月のころと寝とらゆらゆら  
公石を文更よ白六月の土用よ入日塔出毎日  
炎天より一葉けとくけと去利終る日は梅  
て毎日水とくそけとをよくそそとのひらと

台冬三十六

水在月のころと寝とらゆらゆら  
愚考 奉文取聚と黄魯直の侍借水雨花自一高  
水沈為骨玉鳥肌暗香已壓酥醺倒只比寒  
梅空好枝又全詩得水能仙天與奇定香寂  
實動水肌仙風道骨今後有詩掃娥眉  
一枝みよ水をめて仙とすそ名月よとそ  
あそとらゆら

涼川冬夜の感

樽のさげ波を打て腸氷る夜や泪  
芽舎買水

氷著く偃麗よ咽を淫せし

愚考 予と傳曰作由云王治天下天下既已治



矣而然代子吾將為名乎名者實之實也  
吾將為實乎鮎鮎葉於深林不過一枝樞崩  
飲河不過滿腹云々

年中は位位て

和よ飽米と松 するさうね

せまう〜一とよ米とせあ龍

多々款

難われる教るの氷の森是か

蔭氷お目のすくれ茶中

芥燒や権崎の田井の蔭氷

悪考 万とふ司能波根のすそわの田井よ秋田  
并妹々 やらむあまよ自おやよ又巻白糸よ

利をそのの田井よ根芥をつまみ糸 面の次よ  
くわあをと拾ふうけう外又人し 葉をれハき  
又小塩山の記よ月六太系ゆの根芥をつむ又  
巻白糸月六太系のすそわの田井よ根芥を  
つむすく〜つむす かく 権崎のおる手中心  
後を相悦の御知えよ根芥つむす及の水の  
うす氷を〜うす〜ぬま風そふく

辨治お相ち氏雲亭

面白〜雪とやせしむるのこ

氏雲系考

世〜心とや〜し〜り〜りてねの名

是〜と覺文と年の吟覺夢〜



ふらぶらおれさるる人の許して  
志ありれふやや世々蓮花の香の竹  
くまふやや世々蓮花の香の竹  
寛文七年の吟かの小督を友の位をとん合  
る

山々猫袖つらさうてや雪のひま  
悪毒と伝わりしよとらさうの香  
柳舟を猫山悪毒とらさうの地名よてひ  
二句ありたし古調し  
雪の竹 苗 傷るるを 節あはむ  
雪の竹 上戸の顔 いやあん  
雪の竹 いくさぬ 二穂のあをれや

雪のつらさを人言なきのえて君を食  
ぬれ蓑をさ柄よし雪見が  
大ゆきや篠といはるる位敷の家  
茶臼は賤る見の画は賛は  
つとねしと記つてえむ扱の雪  
りはの雪根原を雪を焚きう那  
雪さふ一馬よものぬ家やが  
其さうにをさるるやねむ松の雪  
此句あり舟集におるは雪落さぬやうに枝  
折れかといふ句の回作さるる雪見さ  
雪見に道途して抱月亭  
六人よいて是を愛する雪の 三



箱根哉寸人もあつりいれの雪  
公石云本朝年代記に元明天皇和銅七年相  
伊豆の境箱根山の路を過りて尤箱根を相  
川の北なり

旅人をえり

馬をえりへたる雪にわたりて

雪の歌を陳業言亭より  
少き雪よりいかに雪を并雅章  
の歌歌を傳へてと詠て主よ  
給たりていれをえりて

京よりてりて中天下雪の中

是考のてりて書たり中堂まよるるをい

より那すりて花を井雅章御より權六納言より  
園東へ下り白れ物よりちるへ一延宝中よ薨  
一「らちいれりれをく吟誦得たり  
りきこつて中尺なりて  
さたりてりて海よりりて衆名の海をりて

熱田宮所修復後ぬ

麻子とてりて流も清り雪に

是考熱田神社より祭拜五座第一天照皇太神  
より二素盞鳴尊より三日本武尊より四宮實姫命  
より五建稲種命より土用殿と称すりりり中  
草薙實劍なり日本紀曰素盞鳥尊乃千以地  
韓劍之劍斬り頭斬り鴈斬り尾之時劍及少く銀故



裂尾而看即別有一劍焉名為草薙劍此劍昔  
在素盞鳥尊許今在尾張國也

同紀曰景行天皇五十一年秋八月日本武尊所佩草  
薙橫刀是今在尾張國換田社也

貞享元年即冬去の年有て此作同三年此冬之  
去年の位縣を思ひ出さず

越人ト一野に於

二人云々一雪を以て年七降より

愚考千載集一「も海もにえ一人いづれ  
なりぬる」一月をむりしよかちしはるる  
の債れさりとと二人猿採えたのもさきと  
ありしと一聖年の吟きさや

白冬四十一

一書に信及誦訪大明神御射山祭七月廿七日也

守ちりし也 穂登の尾は新野

舊の穂をもつて所仮居を遣り小なるを智て  
神糺一よりかゝ依りて穂登は神事ととも  
いへり古事多し「尾むちく穂登の所あり  
れ一むしよま志す」一ある秋れくさやる  
「おさゆふ山田の餅のむしよさ新人を以  
てかふはたふ新野」一此のむしよさ  
かふひて名ふり  
愚考誦訪り昔誦訪の至さるは天武天皇  
三年誦訪を以て信法よ合せり一國とさる



今より詭訪教として言たり又御射山とのあり田  
 村慶安陪言無名を伐むるあり信濃のふいよをき  
 所神又武運を祈りて人異人詭訪湖のありよ  
 するをおくし七堂をを射りし此あり御射山とのあり  
 ところ七堂七月廿七日の神より以上の詭訪の東の  
 山よりありをを射りて信濃をを射りて詭訪の東の  
 ありし移るるありし詭訪の東のありし移るるありし  
 公石云我も内野の詭訪のありし移るるありし  
 之社よりありし詭訪のありし移るるありし  
 ありし移るるありし詭訪のありし移るるありし  
 十月多哉つるありし詭訪のありし移るるありし

名訓八作の内

まて四十年よ及へといつ大佛の柱立と歎息  
 したるあり

又一身あり雪懸といつ大佛の瓦葺とハ兼し  
 則大佛之像

- |          |     |                             |
|----------|-----|-----------------------------|
| 面、長一丈六尺  | 廣六尺 | 胸、長二丈九尺                     |
| 目、長三尺九寸  | 五寸  | 眉、長五尺四寸五分                   |
| 鼻、口三尺九寸  | 徑二尺 | 日、三尺七寸                      |
| 頤、長一尺六寸  |     | 頸、二尺六寸五分                    |
| 肘、至腕一丈五尺 |     | 螺、髪九百六十六 <small>高</small> 尺 |
| 掌、長一丈三尺  |     | 肩、徑二丈八尺七寸                   |
| 脛、二丈三尺八寸 |     | 腹、長一丈三尺                     |
| 膝、前徑三丈九尺 |     | 中脂、五尺 周、四尺寸                 |
|          |     | 膝、厚、七尺                      |



足ノ裏一丈三尺

土蓮花 周三十四丈七尺  
高廿八尺

蓮花銅座 徑六丈八尺  
高廿一丈

花 二百八十枚  
周二十二丈四尺

基 周二十三丈九尺

佛工

番匠 後五位下稻部百世 後四位下國公磨呂

後五位下稻部繩手

百濟ノ人也

冶工 後五位下柳本男玉

後五位下高市真國

後五位下高市真磨

我ノに延喜 正曆 天喜 治美 永正 等 數度の

炎上ノて在ノを打ちけりての次ニ

後

大の雪也 聖小僧の笈 此以迄

是考 聖小僧も言 聖の若僧をいふ哉

おのゝ雪の 誰人ともいふ

ゆはせしとて 老の後志賀の

里にかゝれ 傳さしと云ふ

今大津松を 傳し 智月と

いふを 尼の許に 尋ねて かく

るを といひ 出づる つひと

ありし 語りしを

少将 此 尼の 咄し 志賀の 雪

一書に 井陸 抄に 藤原 門院 少将 かの 雪に

つき わる 此の ありし こと におもひ 記して



多岐なるをいふ此が将尼よならして大はし  
強るが持の尼とりよ智月尼と乙州の母尼母  
親して俱に稀なる此の白ちり

我々の戸の初雪見むと余  
不母あつてもいそぎあると  
あやしくひさるるに沙を  
ハりてしめて雪降るを恨む

初雪や幸ひと霽よまよりの丘  
是考白氏文集に蘭省花時錦帳下广山雨  
夜草菴中ちりの侍もも似る

曾良何某も此あつて  
く仮母居を志めて親を

ゆふたのいとむつ同の家合お  
をいとをむとくもく柴をり  
くふるたきけとる茶枝  
烹る時来ると氷をたく  
隠宋を好む人あつてその交り  
あつてをり或は雪の訪ハ  
親しむ

君火のきけしよきお見せむ雪丸け  
是考多良も信路酒坊の産して江戸にちり  
てを懐き侍を公たせしと中侍も此酒書  
よても退牙してト君一翁の言にれたさるハ  
こそ桑畑乃の同好してゆきうたされさるに



よき此金の交りとし後こひてかくらたもふれ  
玉ひし二此金の交りとし二人同心して金を  
りとしふをさしとせ

卒兒婆小町賛

阿そまたふとし(世若もそし  
等もたふ少し)いつれの人  
かこひ傳へいふくぬ人う写し  
とめえりふ裁のまじけり  
今あつに現すそのくしあ  
と若も魂も又家にあつむ  
若もそし(世もたふ少し)  
たふすはわ雪もあつむ日も若と世

是考 卒兒婆小町し 音曲七小町のくしあ  
不悟 草子洗 嬰武 園る 卒兒婆の清  
通 山本さし小町の傳も七部大鏡も

阿り上人死像賛

按ててく身らさる若ものとおさ  
ゆきのある目とはむくこ若あれ花  
乃降るりらうの色とそす

閑居箴

阿くおく此の世やり  
人のとひまあるもく  
人あつまのえり人をま  
らしとあつむひあつ



物ふさばく月の如雪の目  
はる友の志しきももちや  
ふしやおをいそげ酒  
のそそ心よとひかよか  
庭の戸をいぬく雪をさ  
ましきも益をとらして  
そ免るまをまはりも死  
くさこのまや

酒の免をいそげぬぬの雪  
是考歳々文章四十余話の一事文類聚曰  
歳ハ所以政疾ヲ人の病状を療はるなり孔子  
顔淵曰山歳ありといそく非禮勿視非礼勿

聽非礼勿言非礼勿動とそそは代を歳  
すくそりぬれ我くそ牙を歳するなり

湖水眺望

比良之上雪かけわくせ雪の橋  
杳雲云比良ハ西色江之上山も湖東きる  
凡二可斗りと見えゆかさきさの橋を心底よ  
遠く白作あり

為情む鳥も雪此のしり  
草庵よ士り  
本枕のあつて拭ふやおの雪  
ゆきかたみ梁たを心住みか形  
初雪やあ仙の紫れ撲むは



画賛

たそそくても雪まつ竹のやうさか  
杜園亭より中ありき人の

~~~~~

雪とゆき今宵海をの名月を

寒山拾得の絵

夜揮りて雪をわきまて筆か

愚考云山拾得の事三教集に於て書す曰
豊于詔問丘胤曰寒山、文殊、旌迹、国清拾得
普賢、状如、貧子胤到、二国清、礼拜、二人連声
唱云、豊于、饒舌ナリ、饒舌と云ふ多言の義、
又殊、普賢と云ふ、にいふ、多言と云ふ、此は

川大橋を至りてに

初雪をかかけたる橋の上

雪の朝むとら干鞋を踏踏し

虎を不惟子雪を小段の端

愚考右調よりかきし、雪を踏、虎、

夕比、雪、虎、虎、虎、虎、虎、虎、虎、虎、

そんじ、虎、の、い、ひ、け、し

おやあ、虎、人、や、虎、の、板、庇

板の影に、虎、か、つ、あ、き、か

画賛

琵琶の弦の玉あり

一、お、よ、る、あ、き、し、と、あ、せ、ら、し、何、ぞ、あ、き、し

王昭君の馬上より琵琶を弾きし事をもて
 昭君怨といふよき歌あり一説するに
 あつたれとも昭君の琵琶ののねとあれ
 て白樂天の琵琶ののねに極まるる其曲
 六百二十二言のくち大絃嘈々如急雨小絃切々
 如私語嘈々切々錯雜彈大珠小珠落玉盤二
 見しもの句をよめても玉ありれの字眼より
 踏よ表琵琶ののねとあれを傳へては
 お曲よいふくうひてをいふも
 ふくくひ琵琶ののねを言て
 元来きくは此方をもくの古 格
 いさ子信をりあつた玉毛丸

百冬四十八

愚考の紫葉よいさ子もかひの浮又白妙
 の衣はくめきてあは葉つるくむ此子の模写
 夏態するや
 いのめし牙きやあはは松竹
 松竹云山の影に阿つたもくもく
 くもく二つとも松をたてては紫葉の葉は
 とくくもくの一様なり
 船はのその舟を人を訪ひては
 あつたせよ綱代の氷魚煮て出さむ
 雑飲よ琵琶ののねとあれをいふも
 いさ子信をりあつた玉毛丸
 かゝ舞や何れもあつた玉毛丸

者由也為親百里負米親後南游於楚後
車百乘累茵而坐列鼎而食願負米百里豈
可得乎多此意也子路て一め親は仕ふ所ハ
なふの富貴はよくて親といへども親はこれ
を云はる人なく所念皆髓に返るとの文
後さや又親を思ふかつて一則親を思ふた
わくれ今かくたおこつておれを思ふ事
心解く少くおれに雷鳴はくを親とておれハ
見まゝ人なく所念子路は思ふ事ハ等しと
いふ事を思ふ所の相救の事さや一まじに
たゞへの速憶して蘇元を信ふの終り

白冬五十一

さねを家語の志子路は速憶といふの速憶
とよくし考へて思ふ事ハ味を味として
叔徳人の見る所も子路も勇くといふは眼
々々みする所も中もきもれと心持を思ふ
大は非さや一まじに思ふ事ハ等しと
所をの相救の事さや一まじに思ふ事ハ
辨考状は云有陸則張魚鱗陸張陳張良智
略相冷矣余上と諫月明叔非江浦則夜多
彼危掛袖紫紅重推寄汀終日威樊吟勇
是まじに思ふ事ハ等しと思ふ事ハ等しと
いふ張飛樊噲辨慶金時何そ子路一人は
限らぬや蘇元とて又速憶の心と云ふると

初之入一彼義仲の擧げの山々存想しとも
ありし只し心をあつて考ふなり一抄の更
み義仲の精気懐古なり此書多きを自序に
述懐しよの予路とくし屋のたまり

十二月九日一井亭

旅森一宿し原をの文月抄

雨虎雪も氷も沙をこの那

何れ此沙を以て一節はゆく馬

一本よりいくよ此と五文字を出すと都々

三つの紙に云此句を文章にいきなりありと

愚考源氏よりなりしきいろとさるしよ何

に此来つて心も改おひそめり心此五文字を

之入すいと又くしり

公石云抄寫より自序に物を破るれりよ家

信徳よりとも事よりおそく端を二節寫

を述べて大まかにおそくたつたりよ

五文字より自序の用を身に出入り候を

かくきりしと原を以て海のかいり

一書云此句かりしよとれ句と云て底を

世中の節を以て白さるし抄をとりよ

考ふなり一その人れを記すにせり

やかりしかりしとめけかくしとの依

悪評が俗解をすして物の曲を汚すの

賊之候同門の曲をすり又かりしよ

屏風をまかこむし火鉋子
子系をまかこむし姫う帳子に
上をまかこむしおのふくし
足袋もいじりまかこむしおのふくし
ておくまかこむしおのふくし
隅網交とも取ちりたる
中にお佛のうしおのふくし
同じくまかこむしおのふくし
子に標の破りまかこむしおのふくし
おのふくしおのふくし何れひら
みやとあふし味覚と味覚
大男の代名かかこむしおのふくし

台冬五十九

おめりうたにまかこむしおのふくし
うらや相まかこむしおのふくし
強かへつ向つらまかこむしおのふくし
かけらまかこむしおのふくし
おのふくしおのふくしおのふくし
おのふくしおのふくしおのふくし
おのふくしおのふくしおのふくし
おのふくしおのふくしおのふくし
おのふくしおのふくしおのふくし

一
おのふくしおのふくしおのふくし
おのふくしおのふくしおのふくし
おのふくしおのふくしおのふくし

まるくむ花の籠れわけ不れや下階手
 後志東么寂連れまに是や其のくく不修
 勢をかろくもの籠を古核子れさびまかへ
 せられたるへ
 一書よ云の葉は傾よ射して換投の白とる
 せりり学もさ中くまむらけりて門戸
 笑くくかゆくあの中此何みやさすりふ
 やれく世のまく整もけのまられれ流
 ちひくく換子くと其人よたをくく終
 やー白より
 長考此其書對門へ傳とありて古核子く
 て出れなきに雅之核子に古核子とり事

白文五十五

いく何こも古五答の分能るへ一是を
 此を一書を候ふ
 中核子と已く桐つる大玉の部
 防川亭
 香を揮る梅は花又の軒踏
 うちまのうも花入さくま核 桂
 此中を不ひとりよるま首
 院の帯れはめさせま入地さる
 によしてなくひとりのまし
 里人のあつて傳るを何れの
 人の書とくあまうれくも志す
 傳れくかーふく是核子ま

梅核早咲つるむ保 曼の里
是考一本よいつきの後代ともあつて院の
何やういふて我の厨をもつた名も強つて
いふかゝるべきはるるおとすも習を
せやくもく不ふひのを抄をさすハ保
の縁を

寛文 辛 葵師をの末梅を老
の縁まで

梅 高の落やめをふ梅 秀

愚考荀子曰節奏陵而文生民寬而安上安
功名也又万葉集今日西之雪尔競而我屋戸之
木乃梅之花開二窓室の古きやん

采の朝り花朝ら

節あよりの花下も風物七海をい

節あよれを雀は笑ふ出をうさ

あつたつて僕隸の名く首あよりの出をの

あやうきを下帝の才をいえてもけがら

かきしつふふたの雀の比喩はよも生や

偽りの音に骨まよへん

梅をさるよおはさし葉采のそむ

くまうて梅を研の徒衆も

前以し海りまちりもちの喜

一言よ「お甲とく人よ」おぬのちの
みそりまちりま有ぬの月と

年一忘也三人ト水を喰ひ喰ひ
中と切大と満也らんは猶月未
系故を去出さるる也此の初笔
二春をすうらて

人におれを買ハセテ我も年忘れ
此のうき流るる年のぼろぼろ心
落れし御霊ふあふ景桃丸無り

半日ち神を友とや年忘れ
魚子の心を去るるれり忘れ

愚考在子與惠子遊於濠梁之上莊子曰
儻魚出遊後客見魚樂也惠子曰子非魚安
我安知我不知魚之樂下略又方丈記子曰魚鳥

句冬五十七

の分神を又よ魚し多し肥れ魚子ありこれハ
其心を去るるれり林を斬るる子あり
去るる心を去るるれり閑居の忘味又此の如し
何れしやたまはさるる心と云々

やらうれて年一忘れまらる様嫌か
一体の去益買むと云々
年一忘れ線香買に出るや
盤面を人おとの免そ年一忘れ

画賛

何れもや汝、親の小松、夢
り年一忘れ又云々梅の花
画賛

汝方の浦北年、たゞのち紫一把
 一書は海ある方、此紫一把、何れにりて画し、まは
 楠柳り、し、より年一の山、投たれ
 公取云は、極く、心、常く、常の、代、楠柳を、出、す、成、し
 ち、波、や、蟹、の、何、れ、に、代、俣、智、系
 山、吹、や、井、の、の、長、者、を、年、の、宿
 愚、者、山、吹、や、井、の、を、出、出、む、為、の、巧、ま、さ、る、へ、
 彼、井、手、左、大、長、殿、の、む、う、も、お、も、ひ、合、さ、り、し、る、
 義、係、
 忘、ま、さ、る、業、飯、の、つ、り、む、事、の、書、
 愚、考、矣、成、業、の、世、也、第、一、兼、名、花、の、う、忘、ま、さ、る、
 白、冬、五、十、八

一、万、事、を、承、し、お、ま、り、世、世、を、承、り、な、ま、あ、る、秋、の
 末、り、ち、ね、さ、る、後、の、か、の、何、者、の、山、は、お、か、て、ま、忘、
 そ、と、い、ふ、後、の、む、う、お、て、考、
 う、う、と、年、も、承、人、や、古、曆、
 ち、く、に、子、孫、を、と、ま、さ、か、り、こ、
 命、を、お、ま、さ、る、う、孫、孫、ま、う、
 年、れ、く、ま、し、り、れ、た、
 ち、一、書、め、ま、さ、る、て、わ、り、ま、さ、る、ま、
 ち、て、く、ま、し、り、書、く、く、い、は、す、
 う、ん、と、の、書、り、ま、さ、る、
 め、ま、く、ま、さ、る、人、の、数、も、く、ま、さ、る、書、
 ち、う、ま、さ、り、り、く、ま、さ、る、年、れ、く、ま、

抱後云 唐川百そよよ「あみあみ」我はつと
平にゆくまてふと〜もりふに成工りか
盗人よあつたおもあり事の手書
一書よ室のむろ〜に富美と今の信ふ美を
背〜と今も〜〜〜もれもあきれを切
年比その名残よ情むと〜と嘆息〜と
作らふとあり

代しれ賢き人しと在り
志まか〜も〜もれよおもは
信〜〜〜〜〜もれ乃
を〜と〜と何〜もつけ
〜も〜も〜も〜も〜も

百冬五十九

〜か〜のあま〜も〜ひか
〜ふ〜〜も〜見〜〜と〜
初〜の〜〜〜〜
〜雪をか〜〜を〜
〜の未伴陽の山中〜
〜不父母のい〜か〜
〜と〜〜〜
〜と〜〜
古郷や麻れ統は今年れ書
〜別の底も〜〜の〜
月雪とのさ〜〜
愚考各門実よ表有る花秋有月有者

涼風多者雪多 仕閑事 概心頭 便是人間好
時存 一々く け 意を 見 承 一

松 ねいりるかかむあまは少ししの手書

一書ニ云山家集云「今きり 歌ふことえの浦
れ 陰をかひあをせとて おけよくくつと
思考すふれ 巻の心くをたての 句さり 海ま
くもあゆましく 見つおして まゆめくをめし
いてく 風 語る 浦 又 年 みるさよまよし 空ハセ
あふに さましく 押すけり とき 牙の ことを 中す
そこそく くるましく 又 つるも 心の 終 愚を 回し
と 何う 笑さると されよ 見 語る 風 衣としかつ
けさ せに ぶを いたり かく ありあま と けさく せ

白冬六十一

枯 茅の 中 こと さい 一 や 捨 小 舟

元 頼 和 尚より 誦をよま
たりりる返り ませてある

水 空く 藤 入 兼る 鷗 け 那
ふの 存も 都て かくて 初 時 雨

本 曾 原の 虚 翁 け 許 一
や たりを せり ためて

本 曾 原 とう とう 合 せ れ ぎ ち

世 評よ け 白を 翁の 辯 世の 根よ け け
す とも 推し
又 鏡 かけ して 髪 仲 穿 不 蘇 け け け け
祢 け け の 吟 け け け け け け け け

石塔の白をせしむる世むや為らる
 枯尾花よ云先了のむ推の本もありと
 吹下—幻住菴より書き世なき—
 本若殿と塚をやりてとあまし
 くりわれも塚のかくり白よぬぬその
 きささ—此の星月の光と影くさし
 當めを流るよたろやのき向とも乃
 あるを流る表と思くを云
 本若殿の辺虚ろ解りてふといひあ
 くるをけ美伸寺の華るの花表と
 其角を書るよて知ぬ—又そのきささ
 とよ—西二人も二月十日日よ寂すと
 記

白卷六十一

是則相傳の意致のむさゆ具つもれと拾之
 いける甲斐のむさゆおも—是もむさゆのむ
 世りや—うれ—はむさゆをその傳りよむ
 世りよ—是もむさゆをく—はむさゆと無—た
 なる—はむさゆのおよ—はむさゆ—

はむさゆの二兄の伝連を筆の書

愚考二兄々浦も丹波播磨伊智とにあり
 此のむさゆ連をもて伊智は空め拾の二兄
 たりけのむさゆ拾をもていせは空む拾と二兄
 の漢合ふむさゆの二兄よ—とむさゆを
 又拾—

茶乳花に人甲ちうき山路は
 此紫よりおに俾運るふ侍授きし
 笠を敷くも入て志る。飛のち
 右之句は諸國海境集子見入り
 子を脊山妹山おろしうけり
 愚考らちうとら師之の累子女の乞食の懐き
 弄をてし門くは立唄うしそりのをとらそを
 うちら弄と作し子を脊おし妹とら乳母と
 少せむ巧言たり女女の乞食をれを子を脊
 おそ出るもるく者下を右調し
 朝おあはは流お山崎をかある
 四市より馬は系て杖実

坂引上り小荷鞍うちかる
 了てるよりの度ぬ

歩りちうて杖実坂を登るが

胡蝶云二段切連二校云此句は名匠の報
 じし論を二文字切し似しまじもたれを
 二段切とわいしむしむれ何とるれを
 杖つきなき杖をうきて歩りてし杖を
 きなきと爰に一段の詞を返しけるに
 名匠落るはと爰は二段の心を返す
 此杖りて句之内くあすは鳥丸光廣
 卿の報りま「その外くかちとる通る旅人
 もみなり杖つきは里とて杖を返す

抱儀云杖突坂と石系原の東なり此坂も杖突の
名ありてりとも日本武尊の醒ヶ井の夜足を三重
縣より曳下すとき佩刀へ系取れ御劔をとれ
左に免く杖よりつきまふより三千歩れ今
までも聖意を想夫是を吟ふてり大尊を慕
崇へる系自然に徳化感へり云々
愚考此句は古書諸集ともに業名よりくる
系こと有りて非なり業名より石系原直に下
り云々三十二丁之四日布より石系原直に下り
下りてり必定なりハ白皇子れ上より下り杖
つきぬを担民れ方なくく白作りき次中
と云やのみささるるなり

新比こりりく新牛屋う那

杉亭云陸放翁荒村寒雨晚凄々四壁頽穿旋
神泥物我元須各安穩自苔半屋織鷄棲の付
をるる

ららるる雨の徒ををるる

世中しりし不宗祇の舎り那

新比云宗祇法師の脚の片にて新比の宗固
もくたにまより新比り水を宗固とるる
新比法師よりかき喰れとかり新比といひ
りくたに宗祇はけり入る宗をかりをわと
けり新比りかき新比今二條院新比の
世より宗祇よりかき新比を標のわり

やすくもさるふ村——と道かど讀るをえ
 て世よふもはしに何ものやとらふも宗祇
 の句あり是くをおかひ合せて既陀を合の
 むくし成るひい處もかくちす水たむ
 又いさく迎來梓行の南臥養言とつあ書よ
 「世にふるもはしに時雨のやとつか 宗祇
 「世にふるもはしに 宗祇の時雨うね 芭蕉
 此二百人の志るとこ強ちあり按るに去那捨遣よ
 後村上院の御句よ 「世よふるもはしに時雨の
 ちとらふもはしに此句知るはれあり心と初めく
 出せらる此心も流石の宗祇清製の句を知り
 けりて世しるるをなす心よやすけれも

家多るる句よ 「お月雨や ちるおひそる
 松の月とつらを 清人程劍南の詩より作られた
 るをこつてに長夏草堂寂連曾聽雨眠何時
 懸月色松影落庭前と云々は是れを芭蕉が
 句を稱し、此句を筆しと思へるも、
 此さきより移の句は清人の集より一字かかす
 あり句あり其集の名を忘れしや茶乃言の作
 者宗祇の——に礼をなすこと却て芭蕉が
 お月雨の古句を——を知りしるも吾念くや
 いさむ
 愚考は白く此文ありきといつれの本も
 皆さきより出せりしを銘よ

徳い鑑

草乃扇よひとらうらひて短風さひしきさをうく
竹面だこころよあふひ妙記うかふあはらうて
こつうう竹をこりう竹を割るを望飛うの箱と
名のこころあうあうそれを日体ぬよよのうらう
たふつて望みれをあふとあうてあふすけいこま
紙をかきこくたふりて又うさうく信といすあ
をりて毎こころかきまうりくかううらうり城
思ふ元日すくろ程もくやあまよれその
うらう書れりよまふ入あこぬは吹くまあ
とあまのあうそひうらうふ似くまうりあ
ふあめをりししそまうらうこれいみしうむらう

冬 六十一

ゆうきゆうのうらよ巻一〜西行法師の富士見
ひまう東城居士の雪見ひまう東城居士の雪見
つとねを豆心天れ巻は杖をまひうむあうはそひ
時雨よかこふあきうらうめてこころよ自す自あ
うちよいて像は感するこり何うあふひ家
紙の志くれりうてりあうのやうりは紙をうら
るあうてうらう〜差のうらうよかこつせ侍る

世よふれハル〜み字紙のやうら
はひ字紙の時雨は〜す〜六根やうり世の障る
し心かこころしこころ世の強る〜時雨は
やうらうとおあう〜半〜一〜差のこころ
暫時の合るとあれも字紙の合るといふ

内子時々の鑑りて侍るやう
妙記り日未考

竹取の巧まはひ竹を物行の爲のりり
人よく知れる所やういふ竹を物行といや甲
斐の玉の古事等をなして作れりやういふ名風
お記し白昔富士山ノフモトニ竹取ノ翁トテ竹ヲ種テ
アキナヒケル者アリ彼ヲキナ菌生竹林ニシテ鶯ノ
卵ヲ見付タリ暖置フノ千程ヲヘテ是ヲヒ
容顔優ナル電姫トナリケリシカニカレテ養子
トススケレ後ニカノ翁カ田作りケルトキニ暇ナク
シカハ養母ノ訟ヘテイハク隙ナキ時ニモ何トカヤ
子助トナリ給ハサルトナサケナク云ケレハ鶯姫コレ

一怒コトニテ富士山ノミ子ニホリテ山岩ヲ蹴破テ
湯ヲ走ラカシ田ツクル人カレテミナ焼石トナル下略す
是やうそれとついで行な物種を修りたるやう
彼余吾故の天人と云係の松原とつすの歌又後
笠原の翁と名を承るとも自称の奥やう

西のの翁と名を承るとも自称の奥やう
東坡を宋朝の人宋の臣太家とて侍を名
書と能はし蘊軒字子瞻と号す黄州に居せり
れて東坡居士と号す東坡居士といふ言
也蓋とも別東坡居士と号す
皇天の雷もや杖を曳む是も七部大鏡冬の歌
よくきりく出たり

臘梅やむのー永井の全後

或人云合類節用云臘梅一名黃梅法本非梅類以
其與梅全時香又相近色酷似蜜梅故云云此句
昔永井伝ふる書よるに云くせしむる一故事云
信ふく永井忠を丈夫より三田代と是中信流守
尚政のり方なり

愚考臘梅を冬梅とて臘梅を黃梅とて是あり
を臘梅と山谷待よ一首ありて臘梅の待を次山
よんえ傳る臘梅のめりく冬梅とありすむを
何そわさく伝ふるや然るを合類節用の臘梅を
引と非ざる一増山井月も臘月の季よ出せり
句の語の終りきよえより古調をれを如し

冬 六十六止

追加山崎

自画賛

寺にゆく坊主の形や初時雨
苔の美は時雨よとくれ陽灰が
上りゆく時雨と暮らや 車坂
時雨の柳の脊や中の唇
歌の美は時雨よとくれ陽灰が
石山の石よとくれ陽灰が
屏風よとくれ陽灰が
松風や大の舟くる 鐘よとくれ
頼むるよ藤沼なよとくれ
候搦や都の町の朝月灰
乃歌や何ふれ浦よ年をむ

白巻六十三

曆

家祖芭蕉公和明曆三年
主人蟬吟子に随ふ俳諧子
変をうと宗房と名宗時女葉
十四とくし季吟の門子入る
機まらと更む貞亨甲子始く

正風歌勅目を云々記中奥の
家とある所の通元録の末部也
古風二十七年西風十一年
家亦いひまてがしこに書於
幾許といふ数を去り次然る
風國泊船集を著しとる

ハツ
タキ

四百余吟を載り次子華雀
の句選子追加今を去り八百余吟
を新次繫夢の茶句集七百
五十餘吟其後素子孫の袖
日記子去り八百餘吟を去り
去り國中に其家條是子

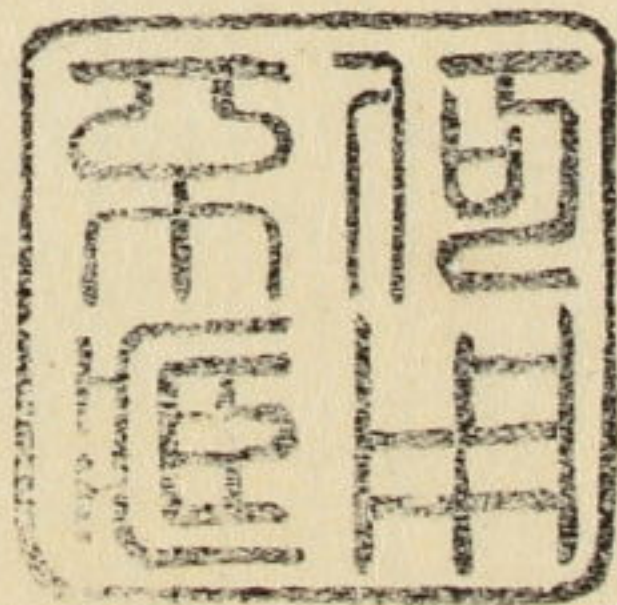
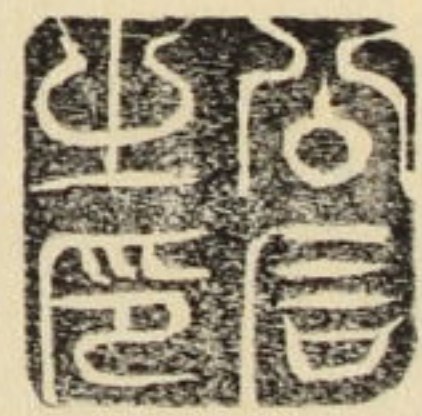
注釋をくわくするの鉅きを
三十余篇におよぶといへども
や、半を過ぎるはるる季、嚴父
物をみむる一焦思、餐、憤、寢、食
を、あ、ま、り、色、諸、國、子、遍、歴、止、
諸、力、形、に、立、入、感、を、所、苑、事、を

ハツニ

膾炙、能、き、吟、を、集、免、く、千
百、八、十、余、声、句、毎、子、に、解、を
く、之、參、考、既、に、整、不、定、又
お、も、し、二、十、七、年、の、丹、誅、子
を、駭、女、一、函、能、當、と、し、る、家、ア、
い、の、ふ、せ、む、道、の、為、能、惟、悻

あまきしをこうせいの中し
とらう初とかもひかくて
あはれなる事

男公石謹誌



ハツ三

萬物異名	俳論語	芭蕉翁句解考	續猿蓑注解完	七部解大鏡
全十五冊	全二冊	全五冊	完	全八冊

近刻

藥

品

蠹

海

近刻

全八冊

月院社藏梓

文政十亥年新刻月院社藏

京都書林

中立賣堀河東入

浦井徳右門

寺町通二條下儿

野田治兵衛

大坂書林

心齋橋安堂寺町

秋田屋太右門

江戸書林

通二町目

野田七兵衛

四日市

松屋善八

兩國吉川町

山田佐助

下谷山王下

花屋久次郎



板元

